

5. モラエスの“Dai-Nippon (O Grande Japão)”に対する評価について

佐藤 征弥

ヴェンセスラウ・デ・モラエス (Wenceslau de Moraes) は、1854年ポルトガルのリスボンで生まれ、海軍士官となると、アフリカやマカオでの勤務に就くかわら文筆活動を行なった。1897年に神戸に移り住み、外交官に転身した。ポルトガル領事を1913年まで務めたが、おヨネの死を契機に職を辞し、徳島に隠棲して執筆活動に専念し、亡くなる1929年まで日本に関する作品を祖国ポルトガルに発表し続けた。

モラエスの作品は、ポルトガル、マカオ、ブラジルで読まれ、彼の死後に日本語訳が出てからは日本でも多くの読者を獲得した。一方、彼は赴任地であったマカオや、広東、香港の様子を克明に描写した作品群を残しているものの、中国語に翻訳されておらず、中国本土ではまったくの無名の存在である。欧米ではポルトガル語で、あるいは翻訳されて読まれているものの、現代において関心が高いのは、やはりポルトガルと日本である。本稿は、ポルトガルと日本以外、特に欧米の国々におけるモラエスに対する関心の高さや作品の評価について焦点を当てて調査した結果について報告する。

近年、世界的にデジタルアーカイブの整備が進められており、過去の膨大な資料をインターネットで閲覧できるようになってきた。本研究では、海外の6つのデジタルアーカイブ、フランス国立図書館電子図書館のGallica、英国図書館のBritish Newspaper Archive、ウェールズ国立図書館のWelsh Newspaper Online、ドイツのDeutsche Digitale Bibliothek、スイスの国立図書館が管理するHelveticArchives)、アメリカのDigital Public Library of Americaを利用してモラエスに関する情報を検索した²⁾。

検索ワードは、モラエスの名前である“Wenceslau de Moraes”と“Venceslau de Morais”とした。前者は本来の表記で、現在も一般的に使用されている。後者の名前が用いられるのは、ポルトガルにおいて1911年に始まる正書法の改正により、K(k)、W(w)、Y(y)の文字が、もともとのポルトガル語のアルファベットには存在せず、外来語に対して使われる文字であるという理由で禁止されたことや、発音に合わせた綴りへの変更が行われたことにより“Venceslau de Morais”と表記されていた時代があったことによる。

検索の結果、デジタルアーカイブでヒットしたのはフランスのGallicaとアメリカのDigital Public Library of Americaのみであった。

Digital Public Library of Americaの検索結果は6件ヒットしたうち5件は、モラエスの著書の収蔵図書館のリストであり、もう1件はマサチューセッツ大学のポルトガル文化研究センターが作成した“Remembering Angola”という書籍で、その中にモラエス生誕150周年記念事業の一つとして2004年に作成されたモラエスを題材にした短編小説集に対する書評が

含まれている。

フランスのデジタルアーカイブ Gallica では 11 件の情報があり、うち“Wenceslau de Moraes”で 10 件、“Wenceslau de Morais”で 1 件ヒットした。以下に資料の古い順に簡単にその内容を記す。

① スイスのジュネーブ地理学会の学会誌“Le Globe”の 1898 年の雑誌の中で、ポルトガルのリスボン地理学会から 4 冊の本が寄贈されたことが記されている。寄贈の理由も記されており、リスボン地理学会が、ヴァスコ・ダ・ガマのインド洋航路の発見から 4 世紀を記念して 4 冊の出版物を作成したこと、そしてそのうちの 1 冊が“Dai-Nippon (O Grande Japão)”（以下、邦題の『大日本』³⁾を用いる）である。

② フランスボルドーの地理学会の 1898 年の会報（Bulletin Société de géographie commerciale de Bordeaux）に、①と同じくモラエスの『大日本』が寄贈されたことが記されている。

③ 1898 年のアントワープ王立地理学会会報（Bulletin de la Société Royale de géographie d'Anvers）の中で、日本に関する文献の一つにモラエスの『大日本』が示されている。

④ フランスの文芸雑誌『メルキュール・ド・フランス（Mercure de France）』の 1926 年 3 月 1 日号の「ポルトガルからの通信」という記事の中に、モラエスについて言及した次のような文章がある。「カモンイスと発見の時代から、現代のアルベルト・オソリオ・デ・カストロ（Alberto Osório de Castro）の詩やヴェンセスラウ・デ・モラエスの日本の物語まで続くエキゾチシズムの血脈は、ブラジルを除くと徐々に衰微している。」

⑤ ロマンズ語（ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語）に関するドイツの学術雑誌 Zeitschrift für romanische Philologie. Supplementheft Bibliographie の 1926 年の補遺にポルトガルの文芸評論家フィデリーノ・デ・フィゲイレド（Fidelino de Sousa de Figueiredo）の著書『ポルトガル文学の特徴（Características de la literatura portuguesa）』が紹介されている。フィゲイレドはその中で、フェルナン・メンデス・ピント（Fernao Mendes Pinto）からヴェンセスラウ・デ・モラエスに至るポルトガル文学の日本主義について総括している。

なお、著者のフィゲイレドはモラエスのことを日本人と「魂をとりかえた男」と評し⁴⁾、以降この表現はモラエスを評する時に用いられるようになった。

⑥ フランスの仏日協会で発行している会誌『フランス-日本（France-Japon : Bulletin mensuel d'information）』の 1934 年 10 月号に、同年 7 月に営まれたモラエスの七回忌の様

子を伝えた記事が載っている。日本で書かれた記事なのであろう、かなり詳しい内容となっている。概略次の通りである。ポルトガルの海軍士官ヴェンセスラウ・デ・モラエスは、初めて訪れた日本ですぐに風景の美しさに魅了された。神戸の総領事に任命され、数年間滞在した後、日本人女性と結婚し、徳島に行き、そこで人生の後半を過ごした。徳島での生活の中で、彼は日本の生活と文化に関する本を多数執筆し、故郷やブラジルで大変な評判となった。彼の作品はすべてポルトガル語で書かれているが、『徳島の盆踊』⁵⁾と『日本精神』⁶⁾は花野富蔵により日本語に翻訳されている。ラフカディオ・ハーンと同様、日本を知悉し、親日家であった。1929年7月1日に徳島のつつましい家で75歳で亡くなった。七回忌の式典では広田弘毅外務大臣と松田源治文部大臣がメッセージを送った。

⑦ 1997年に刊行されたジャン＝フランソワ・サブール (Jean-François Sabouret) 著『日本のX線透視 (Radioscopie du Japon)』の中に、ポルトガルの大統領マリオ・ソアレスが1992年8月25日、徳島でモラエスの墓参を行い、モラエス館を見学したことが紹介されている。

⑧ フランスの映画評論家 Hastrate Gaston による『世界の映画ガイド (Guide du cinéma mondial)』(1997) にモラエスの伝記的映画『恋の浮島 (原題 A ILHA DOS AMORES)』が紹介されている。

⑨ フランス国立図書館による出版書籍情報 (1998年4月22日) にポルトガルでモラエスの“O Culto do chá” (邦題『茶の湯』) の復刻版が出たことが記されている。

⑩ 2001年にフランスで発行された『映画辞典』(Dictionnaire du cinéma) に『恋の浮島』を撮影したポルトガルの映画監督パオロ・ローシャの紹介記事が掲載されている。

⑪ 2005年にパリで発行された『世界映画辞典：11000本の映画』(Dictionnaire mondial des films : 11000 films du monde entier) に『恋の浮島』が取り上げられている。映画については「驚くべき映像によりポルトガルの歴史を切り取った、美しさと死と愛がする素晴らしい作品で、ポルトガル映画の最大の作品の1つ」と評価している。

以上、現時点における欧米のデジタルアーカイブにおけるモラエスに関する情報を簡単に紹介したが、情報量は極めて乏しい状況であった。モラエスと関係の深いポルトガル、マカオ、ブラジルにおけるデジタルアーカイブが整備されていないことが大きな理由である。

得られた情報の中では、1982年に完成したポルトガルと日本の合作映画『恋の浮島』関連の情報とモラエスの著書『大日本』に関する情報がそれぞれ3件ずつ存在した。『大日本』については、日本では花野富蔵の翻訳による全集に収められているが、単行本として出版

されたことはなく、日本ではモラエスの作品の中で特に重要な扱いをされてはいない。日本に移住する前の数度の日本滞在で書かれた同書よりも、日本で30年近く暮らしてから書かれた『日本精神』の方が評価が高いのは当然である。しかし、海外のデジタルアーカイブでヒットしたのは『大日本』である。これは作られた経緯にその理由がある。ヒットした3件のうち2件はスイス、フランスの地理学会に同書が寄付されたというもので、もう1件がベルギーの地理学会の参考文献の紹介である。①で記したように、リスボン地理学会が、ヴァスコ・ダ・ガマのインド洋航路の発見から4世紀を記念して出版したのが『大日本』である。モラエスは、1作目の“Traços do Extremo Oriente”（邦題『極東遊記』・『極東素描』）を發表したばかりであったが、その評価は高く、この本の序文には「今、私たちの前にヴェンセスラウ・デ・モラエスが現れて、文人海軍士官の中に傑出した地位をいきなり占める。」「日本の追慕」には、あの風変わりな民族について言うことのできるすべてが完全に描き出されており、きわめて少ないページでこれほど多くのことを語った旅行者や経済学者を私は知らない。」と評されており、これにより重要な記念出版物の執筆を任されたのである。

『大日本』はヨーロッパ各地に寄贈されただけでなく、ポルトガルにおいても話題となった。翻訳者でモラエス研究家の岡村多希子氏は、伝記『モラエスの旅』の中で「出版と同時に大変な人気をはくし、完成した九〇〇部は数ヶ月で品切れとなり、以来、一冊でも競売に出ると大騒ぎになってとんでもない高値を呼んだという。この一書によってヴェンセスラウの文名は確立する。」と記している。

現在でも『大日本』の古書には高値がついている。表1は世界的なオンライン古書取引のエイブブックス（AbeBooks）で扱われているモラエスの著作を価格の高い順番に並べたものである（2020年1月4日確認）。『大日本』は、次に高価な『極東遊記』・『極東素描』よりも1,000ドル以上も高く、彼の著作の中では飛び抜けて高い。

表1. AbeBooksにおけるモラエスの古書の価格

タイトル（邦題）	価格（USドル）
Dai-nippon (O Grande Japão) (大日本)	1,841
Traços de Extremo Oriente (極東遊記・極東素描)	667
Os Serões no Japão (日本夜話)	600
Fernão Mendes Pinto no Japão (日本におけるフェルナン・メンデス・ピント)	498
Ô-Yoné e Ko-Haru (おヨネとコハル)	360
Cartas do Japão (日本通信)	345
Relance da Alma Japoneza (日本精神)	300
Osoroshi. Prefácio e notas de Álvaro Neves (おそろし)	240

Relance da historia do Japão (日本史瞥見)	180
O “Bon-odori,, em Tokushima (徳島の盆踊り)	69

次に、海外の図書館におけるモラエスの著作の収蔵状況を WordlCat⁸⁾を用いて調べてみた。WorldCat は、2010 年時点で世界中の 171 の国と地域にある 7 万以上の図書館が参加する Online Computer Library Center (OCLC)が構築する書誌データベースである。調べた作品は『大日本』を含む 5 冊である。『大日本』以外では、デビュー作である『極東遊記』・『極東素描』、『大日本』とテーマは同じく日本論であるが、30 年暮らした経験からまとめた『日本精神』、そして日本では最も親しまれている 2 冊『徳島の盆踊り』⁹⁾と『おヨネとコハル』¹⁰⁾を調査対象に選んだ。

表 2 に日本以外の国々の図書館での収蔵状況を国別に示す。これらの作品は、度々復刻され、近年では電子書籍として図書館で読むことができるものもある。今回の調査では、出版当時の状況を知る目的で、モラエスの存命中あるいは死後数年以内に刊行された初版本または第 2 版に限って調べた。といっても、図書館がその本を収蔵した時期は定かではなく、例えば近年になってポルトガル文学の研究者が資料とするため購入するようなケースも考えられる。また、WorldCat はすべての図書館を網羅しているわけではなく、WorldCat を運営しているアメリカの図書館の情報は多い一方で、ヨーロッパでは参加していない図書館が多いという偏りがある。実際ポルトガルの図書館に収蔵されているものは、ここでは見つからない。よって国別の数字をもってどの国でモラエスが好まれているかどうかを議論することはできない。この表で議論できることは、図書館がモラエスのどの作品を収蔵しているかである。

表 2. World Cat による海外の図書館でのモラエスの著作の収蔵状況

国名	図書館名	Traços do Extremo Oriente (極東遊記・極東素描)	Dai-Nippon (大日本)	O “Bon-odori” Em Tokushima (徳島の盆踊り)	Relance da alma japonesa (日本精神)	Ó-Yoné e Ko-Haru (おヨネとコハル)
イギリス	British Library	1895	1897	1916	-	1923
	King's College London	-	1897	1916 2nd ed	-	1923
	London Library	-	1897	-	-	-
	University of Cambridge	-	1897	-	-	-
	University of Essex	-	-	-	1925	-
	University of Liverpool, Sydney Jones Library	-	1923	-	1926	-
	University of Oxford	-	1923	1916	-	1923
	University of Sheffield	-	-	1916	-	-
オランダ	Bibliotheek Universiteit van Amsterdam Library	-	1897	-	-	-
	Universiteitsbibliotheek Leiden Leiden University Library	-	1897	1916	1925	-

スイス	Bibliothèque de Genève BGE	-	1897	-	-	-
	Bibliothèque de la Faculté des lettres et des sciences humaines	-	1897, 1923	-	-	-
	Bibliothèque publique et universitaire - Neuchâtel	-	1897	-	-	-
スウェーデン	Kungliga biblioteket	-	1897	-	-	-
スペイン	Biblioteca Nacional de España	-	1897	-	-	-
ドイツ	Ibero-Amerikanisches Institut Preußischer Kulturbesitz, Bibliothek	-	1897	1916 2nd ed	-	-
	Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg Carl von Ossietzky	-	1897	1916	-	-
	Universitätsbibliothek der Humboldt-Universität zu Berlin	-	-	-	1922	-
	Universitätsbibliothek Erfurt / Forschungsbibliothek Gotha	-	1897	-	-	-
	Universitätsbibliothek Leipzig Bibliotheca Albertina	-	1897	-	-	-
	Universitätsbibliothek München	-	-	-	1922	-
	Universitäts- und Landesbibliothek Münster	-	1897	-	-	-
フランス	Bibliothèque nationale de France	-	1897	-	-	-
	Université de la Sorbonne nouvelle PARIS3-BUFR Portugais	-	1897, 1923	1916	1926	-
	Université de Lille LILLE-BU SHS	-	1897	-	-	-
アメリカ	Brigham Young University Harold B. Lee Library	1895	1897	1936? 2nd ed	1925	-
	Brown University	-	1923	-	-	-
	Consejo Superior Investigaciones Cientificas	-	-	-	1925	-
	Harvard College Library	-	1897, 1923	1916	1925?	1923
	Indiana University	-	1923	1916	1925	1923
	Kent State University	-	-	-	1925	-
	New York University Elmer Holmes Bobst Library	-	1923	(1936? 2nd ed)	-	-
	Ohio State University Libraries	-	1923	(1936? 2nd ed)	-	-
	Pennsylvania State University Libraries	-	-	(1936? 2nd ed)	1925	-
	Rutgers University Libraries	-	1923	-	-	-
	Texas A&M University	-	-	(1936? 2nd ed)	-	-
	Tulane University	-	-	(1936? 2nd ed)	1925	-
	UC Berkeley Libraries	-	1923	1916? 2nd ed	-	-
University of Arizona	-	1897	1916	-	-	

	Libraries					
	University of California, Los Angeles	-	1897	1916	1922	1923
	University of California, Northern Regional Library Facility	-	-	1916? 2nd ed	-	-
	University of California, Santa Barbara	-	1923, 1972	1916	-	1923
	University of Hawaii at Manoa	-	1923	(1935, 1936)	-	-
	University of Illinois at Urbana Champaign	-	1923	(1936? 2nd ed)	1925	1923
	University of Miami	-	-	1916?	-	-
	University of Michigan	-	-	(1936 2nd ed)	-	1923
	University of North Carolina at Chapel Hill	-	1923	1916? 2nd ed	-	-
	University of South Florida	-	-	-	1925	-
	University of Texas Libraries	-	-	-	1925	-
	University of Wisconsin	-	1923	1916	1922, 1925?	1923
	University of Wisconsin - Milwaukee	-	1897, 1923	-	-	-
	Vanderbilt University Library	-	-	-	1925	-
	Washington University in St. Louis	-	1897	1916	1925	1923
	Yale University Library	-	1897	1916? 2nd ed	-	1923
カナダ	Thomas Fisher Rare Book Library University of Toronto	-	-	1916 & 2nd ed	1925?	1923
	University of Alberta	-	-	(2nd ed)	-	-
	University of Calgary	-	1897	-	-	-
	University of Ontario Institute of Technology - Library	-	-	(2nd ed)	-	-
	University of Victoria Libraries	-	-	(2nd ed)	-	-
	Western University Western Libraries	-	1897	-	-	-
ブラジル	Universidade de São Paulo	-	1897, 1923	-	-	-
計		2	42	21 (33)	21	13

表2をみると第1作目の『極東遊記』・『極東素描』は収蔵館が最も少なく、2つしかないが、2作目の『大日本』は最も多く、42館が収蔵している。『徳島の盆踊り』は、1916年の初版本の他に1936年版についても表では示しているが、収蔵している図書館の情報ではどの版か不明な場合がある。1936年のものを含めると33館が収蔵しており、そのうち1916年と分かるものは21館である。『日本精神』も21館収蔵している。『おヨネとコハル』はモラエスの著作の中では最も文学的な色合いが強く、現在でも多くのファンを持つ作品だが、収蔵館数は13と少ない。興味深いことに『おヨネとコハル』を所蔵している所は、す

べて『徳島の盆踊り』も所蔵しており、逆にこれら2冊と『日本精神』とは収蔵が重なっていない館が目立つ。『日本精神』が日本全体を扱った文明論・文化論であるのとは異なり、『徳島の盆踊り』と『おヨネとコハル』は徳島での生活における随想という色合いの強い作品であり、『おヨネとコハル』は『徳島の盆踊り』とセットのように認識されていたのかもしれない。

調べた5冊の中で最も収蔵館数が多かったのはやはり『大日本』であった。日本論というテーマからすると、後年に著した『日本精神』の方が内容の深さという点では勝るが、前述のように刊行時のインパクトという点が『大日本』を収蔵している図書館が多い理由となっていると思われる。

以上述べてきたようにモラエスの『大日本』が、彼の他の作品と比べて海外の注目度が高かったことを示されたが、では、現代において『大日本』はどのような評価を受けているのだろうか。ポルトガルのモラエス研究者マリア・ジョアン・ジャネイロ (Maria João Janeiro) は、モラエス研究家の意見を引用して、『大日本』『日本精神』『日本史瞥見』は、今日では意義を失っているとアルマンド・マルティンス・ジャネイラ (Armando Martins Janeira) は指摘している¹⁾が、ジョルジェ・ディアス (Jorge Dias) が述べるように、『大日本』においてモラエスは大発見時代以来のポルトガルで刊行された最大の旅行記を書いた、ポルトガルの大散文家のひとりである。²⁾とまとめている³⁾。

我が国においても『大日本』に対する評価を改めて検証することが必要であろう。

註

1) 賀青, 馮蔚韜. 「マカオのモラエス (澳門的慕拉士)」. 令和元年度プロジェクト研究報告書. 徳島大学大学院総合科学教育部.(2020)

2) 各デジタルアーカイブのサイトは以下の通りである。

フランス : <https://newspapers.library.wales>

イギリス : <https://www.britishnewspaperarchive.co.uk>

ウェールズ : <https://gallica.bnf.fr/accueil/fr/content/accueil-fr?mode=desktop>

ドイツ : <https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de>

スイス : <https://www.helvetica.ch/suchinfo.aspx>

アメリカ : <https://dp.la>

3) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 花野富蔵訳. 『定本モラエス全集I』. 集英社(1969).

4) Fidelino de Sousa de Figueiredo. “Torre de Babel”. Empresa literária fluminense (1925).

5) “O “Bon-odori, em Tokushima”は『徳島の盆踊』あるいは『徳島の盆踊り』というタイトルで何度か翻訳されている。モラエスの死後5年経った1934年に徳島毎日新聞に会田慶佐による翻訳が連載された。花野富蔵による翻訳が1935年に第一書房から出され、1969年に集英社の『定本モラエス全集IV』に収められた。また、岡村多希子訳が1998年に講談社から、2010年にことのは文庫から刊行されている。

6) “Relance da alma japonesa”は花野富蔵による翻訳で『日本精神』というタイトルで1935年に第一書房から、1954年に河出書房から刊行され、1969年に集英社から出された『定本モラエス全集V』に収められた。さらに1992年にも講談社から単行本化された。また、岡村多希子の翻訳で1996年に彩流社から刊行された。

7) “Traços do Extremo Oriente: Siam, China, Japão” Lisboa (1895)の訳本は3)の全集Iに『極東遊記』という邦題で収められている他、岡村多希子氏の翻訳で『極東素描』という邦題で2018年にモラエス研究会から発行された。本文では両方の邦題を並べて表記した。

8) 岡村多希子著. 『モラエスの旅 — ポルトガル文人外交官の生涯』. 彩流社(2000).

9) <https://www.worldcat.org>

10) “Ó-Yoné e Ko-Haru”は花野富蔵による翻訳『おヨネと小春』が1936年に昭森社から出され、タイトルを『おヨネとコハル』に変えて1969年に集英社の『定本モラエス全集IV』に収められた。また、岡村多希子訳が1998年に彩流社から刊行され、2014年に改訂版が出されている。

11) Jorge Dias . “A perspectiva Portuguesa do Japão”, in “*Boletim do Centro de Estudos de Macau*”, Centro De Estudos Marítimos de Macau (1989).

12) Armando Martins Janeira, “O jardim do encanto perdido: aventura maravilhosa de Wenceslau de Moraes no Japão”, in Manuel Barreira eds. “*Livraria Simões Lopes*”. Porto (1954).

13) Armando Martins Janeira. “Venceslau de Moraes no Japão da obra à vivência” in “*Portugal e o Japão : séculos XVI e XVII o retrato do encontro* (ポルトガルと日本 16・17世紀出会いの肖像)”. Instituto Cultural de Macau (1993).